

# 尾藤一泉さん 作品を深く読み取る――

川柳が文芸として発祥し250余年。1987年に第一生命のサラリーマン川柳が始まって以来、公募川柳はますます盛況だ。本誌川柳大会も今年12回目を迎え、応募作品には思わず笑ってしまった、「あるある」とうなずける句も多いが、中にはピンとこない句も……。「川柳というのは二重構造なんです。表面的には客観性に欠ける句でも、作者が何を言いたいのか深く読み込むと、違った意味が表れる。作者の真意は別として、選者や鑑賞者は、十七音の言葉の切れ端から、自らの経験と照らし合わせてイメージするんです。そう語るのには川柳家の尾藤一泉さん。

1960年東京生まれ。祖父・尾藤三笠、父・尾藤三柳ともに川柳家という家庭環境で、自身も15歳から川柳を始める。「小学生の頃は、父にもらったニコンのカメラで、写真を撮ることに夢中でした。父は自分の専属カメラマンとして、僕を句会に参加させ、自然と川柳への興味を持たせようとしたのかもしれない」。子供に句会がヒマなもの、一泉さんは退屈しにぎに句を作っていたという。「それが意外と評価されて、『蛙の子は蛙だね』なんて言われると嬉しくて。川柳に強く興味を持ったのは大学生の頃だった。当時、父が刊行した『川柳総合事典』の編集を手伝ったのを機に、川柳の文化的な深さを知りました」ところが「川柳では父親を越えられない」と、絵画の道へ。東京理科大学で、兼ねてから興味のあった絵の具の化学的な研究、就職後も武蔵野美術短期大学を通信で学び、絵の具メーカーへ就職した。「長らく会社人間でしたが、体力が落ちた父に代わって10年前から、本格的に川柳に取り組みようになったんです」。ちなみに絵画の腕前は美大や文化センターで講師を務めるほど。

20歳の時に句会にデビューした一泉さんだが、50歳の今も句会の中では若手なのだそう。IT化が進む近年、公募川柳では携帯電話やパソコンを使った若者からの応募も多いが……。「やはりハガキで応募される年配の方の川柳のほうが上手です。人生経験豊富ですから。ですが、若い方にも興味を持ち続けて欲しい。本当の意味での自分の世代の句を作って、共に川柳界を盛り上げていけたらと思います。そのためには選



者も努力しなければいけません。句を深く読み取るためには、ただ年を重ねるだけではなく、あらゆる分野の知識はもちろんです。遊びの経験も必要です。父から「お前は遊びが足らん！」と言われ、意地で煙草を吸った時期もありました(笑)。

客観表現が中心の伝統川柳、作家自身の主観を表現する詩的な現代川柳、時事川柳や公募川柳など、現在の川柳は多種多様。客観的作品ばかりの伝統川柳を保守する意見もある中、一泉さんは「川柳総合文化論」を提唱する。「250年の間に、川柳はいろいろな面を取り入れてきました。それを全てを私たちの文化として大切にしなければ、川柳はいずれ忘れ去られてしまいます。いくら良い句でも閉ざされた世界に留まっていたら仕方がない、川柳が社会と一体化した文化となるように、もう一度自分たちの財産を見直さなければならぬと思います」。最近ではメディアでも川柳が取り上げられ、社会に大きく露出する一方、選者の在り方にも懸念を示す。「よく(事務局選)というのがありますが、願わくばその中に一人、より句を理解できる、いわゆるブクの川柳家を選者に立てて欲しいのです。企画のレベルも上がるだろうし、川柳の発展にも繋がります」。

一泉さんはひとつの目標を掲げている。「いつか祖父・三笠の代から伝わる、様々な川柳の資料をまとめて管理する、資料館を開設したいんです」。来たる2014年は、川柳がはじめて社会に浸透したきっかけといえる句集『誹風柳多留』が刊行されて250年の節目。川柳があらゆる世代へ広まるターニングポイントとなることを願う。



写真 ● 遠藤拓哉  
日本橋倶楽部にて